

第43回車座集会意見交換内容

- 1 開催日時 令和元年5月18日(土) 午後2時00分から午後3時40分まで
- 2 場 所 旧新川崎・鹿島田整備事務所
- 3 参加者等 参加者24名、傍聴者約14名 合計38名

<開会>

司会：定刻になりましたので、ただいまから市民車座集会を開催いたします。

私は、本日の司会を務めます川崎市市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室の成沢と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

皆さん、先ほどはすばらしいパフォーマンスをありがとうございました。私もこんなに近い距離で見たことがありませんでした。すごい技やダンスを披露していただいた盛り上がるのまま車座集会につながっていただければと思います。

今日の車座集会のテーマは「若者文化の発信によるまちづくり」ということで、地域で活動する方々と市長の間で意見交換を行っていただきたいと思っております。

まずは、本日の参加者を座っている順番に紹介したいと思います。

初めに、インラインスケートの村田龍さん、安井夏さん。

ブレイキンの河合来夢さん、金後優介さん。

ダブルダッチの重本樹矢さん、立山泉里さん、菅井里紗さん。

スケートボードの岸田周さん、佐藤鷹来さん、片桐宏樹さん、大富寛さん、村田鉄生さん、竹井優磨さん、伊賀上薫さん、黒川翔太さん。

KING OF SWAGのDayHeeさん、Mamonkyさん、中野さん、Deeさん、Taitikiさん、KAKUさん。

BMXレースの三瓶将廣さん。

BMXフリースタイルの神保亮介さん、神保虎之介君です。

続いて、川崎市からの出席者を紹介したいと思います。

福田紀彦川崎市長、向坂市民文化局長、原オリンピック・パラリンピック推進室長でございます。

司会：それではここで、福田市長から一言ご挨拶を申します。よろしくお願ひいたします。

<市長挨拶>

市長：改めまして、皆さんこんにちは。先ほどは、すばらしいパフォーマンスを披露していただきまして、ありがとうございました。

皆さん、気づいていたと思いますが、前だけじゃなくて、後ろの駅のホームからも幅広い年齢層の人たちが見てくれて、この人は何本電車を見送るのだろうと思うぐらい、皆さんのパフォーマンスにくぎづけになっていました。すごくいい雰囲気駅前が繰り広げられたということを実にうれしく思っています。

実は私、市長になってから毎月1回区民車座集会というのをやってきました。川崎市には7区ありますけども、それぞれの区は全然違う特徴を持っているので、それぞれの区の課題を、みんなでどう解決しようかみたいな話をしてきたんですけども、今日は区ということではなくて、テーマを一つ決めて、市全域のことについて話しましょうということでもらいました。

今回のテーマは、若者文化なんですけれども、一昨日の川崎市の人口が神戸市を抜きましたというニ

ユースをごらんになりましたかね。今、全国の大都市の中で人口6番目の都市になりました。その6番目の都市で一番特徴的なのが、平均年齢が一番若いというところです。特に若い人たちに選ばれているというまちで川崎市はもともと人口5万人で始まったまちなんですが、95年たって、いろんな人たちが出ては入って、川崎生まれ川崎育ちの人もあるけれども、国内外問わずにいろんな人たちを巻き込みながら成長してきたまち、いわゆる多様性のあるまちだと思っています。

この多様性のあるまちを、私たちのすばらしい誇りとしてさらに成長させていきたいと、そう思っていたときに、川崎はブレイキンの聖地であるということ、市長になってしばらくしてから知ったんです。今日は金後さんと河合来夢さんが来てくれていますが、そういう人たちがいて、こんなになっているんだと。今日いらっしゃる三瓶さんもそうですけれども、BMXで世界的に活躍している人たちがいるとか。よくよく聞いてみるとすごい人たちがいっぱいいるよねということになって、今日は多分こういう集会で最年少参加だと思っただけで、神保虎之介君、虎ちゃんもこの前すごい大会を連覇したのですけれども、こういう若者も出てきていると。

こういうところにもう少し注目を当てて、もっと盛り上げていきたいなど。多様性に富んでいるまちだからこそ、こういう若者文化というものをどんどん吸収して発信していく。KING OF SWAGのDeeさんをはじめ、川崎にこだわって世界に発信してくれている人たちもいて、こういうところがみんなでちょっとずつ、つながってきている感覚はあるので、今日は皆さんの知恵を借りながら、川崎からいいものを生んで、さらに世界に発信していきたいなど、そういう拠点にしていきたいというふうに思っています、そういう意味で、さっき安井さんから聞いたんですけど、安井さんのお勤めのところ、言っちゃっていいですか。

安井さん：構いません。

市長：ムラサキスポーツさんなんですけど、ご自身がこうやってインラインスケートをやられていて、会社にはそういう人が多いんですって。何かいろんなものを売っていく、仕掛けをつくっていくというのに、やっぱり自分たちがやっていて、わかっている人間でないとなかなかできないことがたくさんあると思います。僕たち行政って、今までこういう若者文化とどうやって話していいのかもわからなかった。そこで、ぜひみんなでちょっとずつつながっていきませんか、あるいは知恵かしてくれませんかということをやっていくと、さっき言った川崎が拠点となって世界に発信していけるような、そんなまちになるんじゃないかなと思って、それで今日は皆さんに時間をいただきました。

ぜひ、有意義な時間になるように、皆さんの力をかしていただきたいと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。

<取組紹介>

司会：ありがとうございました。それでは本題に入る前に、今日の集会の趣旨とございますか、川崎がどういうことに取り組もうとしているかということの説明いたしますので、「市民車座集会テーマ説明資料」というA4の資料をご覧ください。

今、市長からお話がありましたけれども、川崎市の特徴として色々な地域人材がいらっしゃるという中で、そういった方々を活かしていく、一緒に盛り上げていくという観点で、川崎で盛んであるヒップホップなどのストリートカルチャーですとか、BMX、スケートボードなどのエクストリームスポーツ、そういったものを若者文化として定義をしています。

次に、若者文化を取り巻く現状ですけれども、来年の東京オリンピックでスケートボードですとか、BMXフリースタイルが採用されています。それから、2018年ブエノスアイレス・ユースオリンピックではブレイキンが採用され、また2024年パリオリンピックでは正式種目としての採用が有

力視されているということで、現在世界的に若者文化に着目する機運が高まっています。翻って川崎ですけれども、この日本におけるブレイキンの聖地ですとか、今日ここにいらっしゃる方をはじめとして、若者文化に携わる地域人材が豊富であること。あるいは今年の11月にも行われますINTERNATIONAL STREET FESTIVAL KAWASAKIや、ユースブレイキンの世界大会が川崎で開催されているという状況を踏まえたと、若者文化は川崎らしい地域資源であるということが言えると思います。

川崎市、今は大都市の中で平均年齢が一番若いまちですけれども、これからは人口も減少して高齢化も進んでいくと言われていています。そんな中で、川崎らしい地域資源である若者文化の発信によって川崎市の魅力を高めることで、いつまでたっても若い世代が集いにぎわうまちを目指したいなというふうに思っております。

そのために、なかなか若者文化を楽しめる施設があまりないという現状に対して、川崎市として新たな環境整備を検討することですとか、不良とか怖いとかといったイメージを払しょくするために認知度を向上させていくことですとか、今日来ている皆さんの横のつながりというのをつくっていくためのマッチングを担うことを、川崎市の今後の取組として考えております。

<活動内容>

司会：それでは、本日ご参加いただいている皆様からご意見をいただきたいと思います。

内容については、テーマを三つホワイトボードに書いてありますので、テーマに沿ってお話いただければと思います。

それでは、最初にスケートボードの片桐さん、お願いできますでしょうか。

片桐さん：スケートボードショップのストークというお店を多摩区でやらせていただいています。店自体は1999年から世田谷でスタートし、6年ぐらい前に川崎市にも店をつくっています。

世田谷には祖師ヶ谷公園というのがあり、2001年から非公認なんですけれどもミニラックを設置して、スケートパーク化しています。知る人ぞ知る場所みたいな感じでなっていて、場所も非公認なのでオープンにしていないのですが、一応パークのような感じで運営しています。

それに伴った活動で、祖師ヶ谷公園スケートボード協会というのも作りまして、行政にパーク設置のお願いをしています。あと稲城のほうでも同じ協会をつくり、稲城市スケートボード協会みたいな形でも運動しています。

あとは大会運営。8年前から稲城パークでもスケートやっけていまして、毎年夏に競技を主催してやっております。

活動はこのぐらいで、ちょっと余談なんですけれども、海外に行く機会が仕事柄よくあるので、スケートボードパーク、評判のいいところは必ず回って見るようにしています。資料も集めて。ですから設置する際には、ちょっとその辺りの経験を活かして参加させていただきたいなと思います。

司会：ありがとうございました。

では続きまして、同じくスケートボードの大富さんからお願いいたします。

大富さん：スケートボードショップ、ゴールドフィッシュというお店を昨年まで8年間運営しておりました大富と申します。よろしくお祈りします。

現在、ショップ経営はしていませんが、本日のようなデモンストレーションのお話などをいただくと、私どもの所属ライダーを連れてデモンストレーションしたりして、あとは映像をたまに作ったりとか、そういった活動をしています。

8年間のショップをしていた間に、川崎市様といろいろやりとりをさせていただいて、大師河原スケートボードパークの設立、あと設計もお手伝いさせていただき、そのスケートパークを使って非公式に、勝手に大会を招致していました。映像作品なども撮らせていただいて勝手にウェブで公開させていただきました。大変いつもありがとうございます。

今の時点では、私はお店の経営をやっていないので、そんなに活動としてはないですけども、理想とする世界像みたいなことを、ちょっとお話しできたらなと思っていて、今回スケートボードパークをどうつくるかみたいなお話になるかと思うんですけど、僕としてはスケートボードパークがない世界のほうが良いと思っているんですね。

なぜかという、スケートボードパークじゃないところでも滑れば良いと思っているからです。そのためには、今のままだとそれができないなと、怖いというイメージだったり、危険だと思われてしまっていると思うんです。ただ、20年、30年後になったら、あの頃スケートボードパークっていう檻の中でみんな滑らされていたらしいよという感覚になるぐらい、スケートボードが普通のものになってほしいです。道ばたで子供がスケボーに乗っていても怒られないし、滑りたい場所でみんなが滑ろうと思えば滑れる。今までだったら、そんなことしたらベンチが壊れちゃうからだめだよと言われているものも、じゃあベンチの強度をもっと強くして、壊れないベンチに全部なっていれば、別にスケートボードパークじゃなくてもいいんじゃないかという考えです。近い将来としてはスケートボードパークが必要だと思うんですが、長い目で見て、多様性で考えていくと、スケートボードパークに閉じ込めるのではなくて、どこでもできるものになっているほうが良いと思って常に活動しております。

司会：ありがとうございました。

次にインラインスケートの村田さん、お願いします。

村田さん：村田龍です。高校2年生でインラインスケートやっていますが、全日本のJASPAという大会で準優勝し、7月にあるスペインでの世界大会に出場することになっております。

僕はどういう気持ちでやっているかという、インラインスケートをもっといろんな人に知ってもらいたいなと思って、いつも練習したり、SNSに動画を載せて、いろんな人に見てもらえるようにやっております。ですので、こういうデモンストレーションとかの話が来ると、いつも出るようにしています。

司会：ありがとうございました。次に安井さん、お願いいたします。

安井さん：安井です。よろしく申し上げます。

私は、うちのスポーツ業界に25年ほどいまして、それこそ90年代前半の頃から日本全国のスケートパークをつくったりとか、あとはイベント用デモンストレーションのセクションをつくったりとか、そういったものの施工、デザイン、運営等をしていますので、ちょっと視点が皆さんと若干違って、どうしてもちょっと裏側の視点になってしまうのですが、現状2020年のお話が決まってから、日本全国でスケートパークが雨後のタケノコのようにたくさんできているんです。ただ、それはちょっと各市区町村が税金の使い方として、今スケートパークを作っておけば盛り上がるんじゃないのかみたいな、ちょっと浅い考えで作られているように見えるところが多くて、正直、もうそのレベルは川崎市さんには超えていただいて、アメリカにウッドワードスケートキャンプという場所があるんですが、そこはスケートパークですけども、青少年育成の施設であって、宿泊施設もあり、プロのスケーターたちが講師としていて、世界中から夏の間にサマーキャンプといって2週間のキャンプがあっ

て、村田も行ったことがあるんですけども、キャンプに行くことによって、世界中の子供たちが交流を図っている。当然トッププロの滑りを目の前で見ることによって刺激を受けたり、レベルアップするということが目標になっている場所なんです。

正直、箱物のスケートパークは、今もうあり過ぎるぐらいあるので、そんなものがあったとしてもしょうがないなと正直僕は思っています。そうではなくて、やっぱりそのソフトウェアの部分で、もう一つ先に進んだところを、ぜひ日本で最初に川崎市さんでやっていただければなど、そういうふうに思っています。

司会：ありがとうございます。

それでは、BMXフリースタイルの神保虎之介君、亮介さんをお願いします。

神保（虎）さん：皆さん、始めましてBMXライダーの神保虎之介です。

僕は、去年、全日本大会で優勝して日本一になりました。学校から帰ると、家の前や公園で基礎の練習をしています。学校が早く終わる日は、飛んだりする技の練習をしたいので、新横浜スケートパークに行きます。休みの日は、難しい技を安全に練習できるスポンジやレジー施設のあるプライベートパークや、全日本大会も行われる鶴沼スケートパークに行き、朝から夕方まで練習しています。僕の家近くにパークがほしいです。なぜなら、今よりたくさん練習ができて、難しい技にも毎日取り組めば早く上手になれるからです。これからも日本一を取れるように頑張って、将来はオリンピック選手になって金メダルを取りたいです。

司会：お父さんから、特によろしいですか。

神保（亮）さん：さっき安井さんからお話がありましたが、僕そこまで話すつもりは余りなかったんですが、今虎之介が言っていたように、BMX、先ほどスケートでいうと、もっとナチュラルなものだろうというお話もあったんですけど、BMXフリースタイルに限らず、ちょっと施設が大がかりなものが必要です。技もどんどん、僕が若いころと比べると、ちょっと危険な技というのが増えてきていて、そういったものの習得って、さっき安井さんがおっしゃっていたような、例えば新横浜スケートパークって、この前、駒沢のはリニューアルされたんですけど、ああいった施設をぼんと置けば済むということではなくて。もちろんそれがあるにこしたことはないんですけど、ちょっと難しい技を練習するためには、先ほどウッドワードにあるようなスポンジプールですとか、あとゴムをセクションの上に置いて、その下にまたスポンジを何重にも入れて、着地の衝撃を和らげるレジーという施設とかも必要だったりするんです。

関東ではそうした施設があるところがなくて、岐阜だったり、三重だったりというところに練習しに行っていたんですけど、年に何回も行っていられないので、府中に場所を借りて、私設のプライベートパークをつくって練習しているんです。ただ、そこも、借りているんですけど、もしかしたら立ち退かなきゃいけないというような事態になっていまして、ウッドワードみたいなすごい施設じゃなくてもいいと思うんですけど、難しい技を練習できるような施設のところも考えていただけたら非常にうれしいと思います。

司会：ありがとうございました。

では引き続き、BMXレースの三瓶さん、よろしくお願いいたします。

三瓶さん：BMXレースをやっております三瓶将廣と申します。

私は今、日本自転車競技連盟でBMXの強化を担当しています。BMXはレースとフリースタイルというふうに大きく分けて二つあるのですが、アメリカでレースから始まって、そこからフリースタイルという種目に分かれていきました。

レースに関しては、2008年の北京オリンピックから正式種目になって、ほかの一般スポーツは今年度の2020年からになりますけども、一足先にオリンピック種目になってきました。

フリースタイルも、大きく分けると神保君のやっているようなフリースタイルパークという種目と、地面の上でフィギュアスケートのようにくるくる回るフラットランドという種目があるのですが、そちらの両種目が国際競技連合のほうに加盟してまして、まずはフリースタイルパークのほうがオリンピック種目になってきました。

僕自身は5歳のころからBMXのレースを始めましたが、最初の出会いというのは、川崎駅の近くのモアーズというビルの上にフリースタイルパークがあり、そこで始めて、そこからレースのほうにいて、ずっと競技をやってきました。

ただ、どうしても国内には競技施設がほとんどない。競技場も5カ所ぐらいしかありませんけど、川崎市にはないので河川敷で練習したりとか、皆さん非公式にというお話が出ていましたが、浮島のほうにいて、ダッシュの練習をしたりという形を続けてきました。

しかし、どうしてもそういった施設がないので、中学生のころから一人でアメリカに渡って、10年間ほどアメリカを活動の拠点にしてきました。

そういったこともあったので、今は強化としてナショナルチームに帯同していますが、彼のような小さい子が困らないためにも、やっぱり世界基準の選手が育つしっかりとした施設を目指していく、ウッドワードのように全てが整っている施設をつくることによって、川崎市から必ず強い選手が出てくるんじゃないかなと思っています。

BMXレースに関しても、トップでやっている子たちは川崎市周辺から出ていますし、施設がない中でもトップ選手が出せるという何か環境があると思いますので、そこが川崎です。川崎から生まれたんだというふうになっていくのが市民にとっても理想の形かなと思いますので、ぜひそういった施設を、BMXレースに限らず、フリースタイル、またはスケートボードとかも含めて使えるような施設ができるといいんじゃないかなと思っています。

司会：ありがとうございました。

では、ブレイキンの金後さんよろしくお願ひします。

金後さん：ブレイキンの金後です。よろしくお願ひします。

まず、僕の活動ですけど、株式会社IAMというところで、今横にいる来夢、ユースオリンピックで銅メダルをとったShigekixのマネジメント、ブレイクダンサーのキャスティングと映像製作のほうをメインに僕が動かさせていただいて、ほかの事業としては、彼女が所属している世界的なチームのザフローリアーズアカデミーの運営だったり、アパレルのほうを活動させてもらっています。

自分の話ですけど、今32歳で、地元が広島県でして、溝ノ口でブレイキンをやるために17歳のときから溝ノ口に来ています。当時SNSがなかったので、見ていたビデオに出ている人が溝ノ口で練習しているというので、高校生のときに来て、僕も世界大会に行きました。そんな中で、ちょうど今一緒に会社やっているメンバーたちと、この先自分たちがどうしていくべきかと考えた末、この今自分たちが熱意を持ってやっているもののシーンを向上させていこうということで、いろいろ活動させていただいています。

その中で僕たちのシーンは、自分の中でなんですけど、少し突破口というものが見えてきていて、溝

ノ口駅で練習していて、ずっと注意されながらの練習だったんですけど、ザフローリアーズが世界三連覇をしてアカデミーを開校し、自分たちの居場所であるスタジオができたので、本気を出せば、そこでみんな練習すればいいようになりました。

その中で、時代の流れでたまたまブレイキンがユースオリンピックで採用され、今2024年パリオリンピックに採用されると言われています。何か自分たちの人種って、僕は特になんですけど、僕は今そのスタジオの運営で働いているから、夜中こそと鍵あけて、自分で練習すれば誰にも文句言われないんですけど、でも駅で練習したいんですね。何かそっちのほうの方が上がるというか。だから、シーンが上がってきて、本当に僕はいろんな側面からフローリアーズをいろんな人たちに知ってもらおう、来夢をもっと川崎市から発信して行って、日本、世界のいろんな人に知って行ってもらって、もう今どんどん知って行ってもらって、ブレイキンってあるよねって、1個フィールドが上がってきた中で、何か、もう大丈夫に、もうここから、もう6年頑張ればなっていくかもなと見えるところ、自分たちの人種はやっぱりストリートでやりたいという気持ちがあるので、でもストリートでやっていたら、自分たちが興味ないことで音鳴らして駅で練習していたら、はっきりいって邪魔だと思うし、じゃあ市民の人たちにどういふふうに解釈してもらって、理解してもらって一緒に隣接して生きていくのか。それも、1個スケートパークをつくれればそれが解決されるのかというのは、先ほどおっしゃられたとおり、まちのベンチが壊れなくなれば自分たちにとってそれが一番理想な形だという気持ちと、じゃあそのベンチに座る人はスケボーの人たちがスケボーやっていたら多分怖くて座れないで、そこは座っちゃいけないベンチに多分変わっていくだろうなと自分で考えていて、じゃあやっぱり我々の業界と、一般の人たちでどういふふうにくまく寄り添って生きていくのか。もちろんサッカーだって、バスケだって、自分の庭にゴールをつけないとか、道路にゴールを持ってきて練習し出したら、それは苦情が入ると思うし、だからやっぱり僕らの業界の見られ方と僕らの業界の人たちの態度と、何か、そのずれというか、そういうものをうまくすり合わせていけば、もっともっと、何かよりよくうまくやっていけるのかなと思っていて、自分も答えは今完全に見えてはいないんですけど、今のブレイキンの人たちのシーンが、よりサッカーや野球やバレーやバスケのように、僕らがやっている業界の若い子たちの虎君とかShigekixとかそうですけど、ほかのスポーツ選手に全く引けをとらない努力、僕と同じ年の子たちもいまだにプロとして、ほかのスポーツ選手以上に体を削ってやっっているんで、僕は素直にそういう人たちへの環境整備とその人たちが別に金を稼ぐためじゃなくても、いろんな人たちに邪魔とは思われない、この人たちが本当にイチロー選手やほかの選手と変わらないぐらい本当にすばらしいものを持っているというふう認知されるために自分は日々日夜活動させていただいています。

司会：ありがとうございます。

それでは、次にKING OF SWAGのDeeさん、お願いいたします。

Deeさん：どうも、KING OF SWAGのリーダーのDeeと申します。今回、このような機会に呼んでいただきありがとうございます。

川崎区の宮前町のほうでダンススタジオ、STUDIO SWAGを運営しています。あと、川崎の貝塚のほうに最近オープンしたエリア044という自分のクローゼットがテーマで古着屋さんといろいろ雑貨を売るような活動をしています。

KING OF SWAGなんですけど、去年1年間、自分たちがダンサーとしてやったことないものを1年間頑張るってやろうということで、川崎での活動を去年1年間、僕たちがやったことないこと、かっこいいと思ったものを1年間やってきました。

その中で、川崎駅で一応ゲリラライブというのをやって、許可は取っていないんですけど、そこで音楽

を流して自分たちがパフォーマンスして、そこで熊本の地震の募金を見てもらった人に入れてもらって、そのお客様たちと一緒に川崎の15号までごみ拾いをしてという活動だったりとかというのを結構メインに去年1年間やってきました。やっぱり川崎駅のあそこも一応やっぱり許可を取らないと踊れないということで、川崎も音楽のまちってうたっていると思うので、そういうところでやっぱり常にパフォーマンスできて、そういう活動に持っていけたら、自分たちはいいかなと思っています。

自分たちが何個かある中の一つで抱えているのが、川崎を世界へというテーマを自分たちは持っていて、その中で、どういうふうに川崎を世界へ持っていくかというのを考えたときに、まずはKING OF SWAGが川崎からやっばこう、先に出ていけば、全ては変えられないけど、ちょっとずつ川崎を世界へ持っていけるんじゃないかなと思っているので、引き続き自分たちは全力でできることを考えてやっていきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

司会：ありがとうございました。

では、次にダブルダッチの立山さん、よろしくお願ひいたします。

立山さん：よろしくお願ひいたします。ダブルダッチの立山と申します。

僕の話なんですけど、23年間、川崎生まれ川崎育ちで、武蔵小杉出身です。ダブルダッチ自体は全く知らなかったんですけど、僕の行っていた日本体育大学に入って初めて知ったスポーツで、もう本当に、すごいイケイケの兄ちゃん、姉ちゃんが縄入って、華やかに踊ったり、ステップ飛んだりしているのを見て、心を打ち抜かれてこのサークル入ろうというのがきっかけで、いろんな大会で賞をもらえたりもしたんですけど、今社会人2年目になって、一応プレイヤーからはちょっと退いて、僕自身は大会などの司会だったり、あとそういった学生の大会の裏方で動かさせてもらっています。というのも学生時代に学生連盟の代表もやっていたので、いろんな地域の小学校にダブルダッチを教えに行くというものの統括をして、学生たちで一応動いておりました

やっぱり、その中で僕と同じようにダブルダッチを知らない子がすごく多くて、ダブルダッチって何とどこからスタートなんですけど、2本のロープの縄跳びで飛ぶスポーツだよというふうに言うと、ああ、あれかとなるんですけど。

ダブルダッチのあるあるで、お兄さん飛ぶほう、回すほうというのが、すごいあるんですけど、ダブルダッチって、見てもらったらわかるように入れかわるスポーツなんです。僕なんか、当時から太っていたので、お兄さん太っているから回すほうでしょというのがよくあったんですけど、どっちもやっていました。

ダブルダッチ、二つの競技に分かれていて、本日二つともお見せしたんですけど、音楽に合わせてパフォーマンスする部門と、あともう1個が音がない状態でどれだけ早く飛べるかというスピード部門、二つに分かれていまして、それぞれで世界大会があって、日々それに向けて、みんな頑張っております。まだまだ認知されていないスポーツだとは思っているので、川崎から世界にじゃないですけども、もっとダブルダッチが知られるように何か動けることはないのかなというのは日々考えていまして、一応プロのダブルダッチも何チームか日本にありまして、最近はメディアの出演も増えていて、いろいろアピールはしてくれているんですけど、まだまだ足りないなので、川崎市どうか、ダブルダッチを有名にしていたら、何かイベントであったり、一緒にできたらなというのは、微力ながら思っております。

司会：ありがとうございました。一旦、いろんなジャンルの方から一言ずつ、これまでの活動にかける思いなどをご発言いただきました。

ここからは、市長との意見交換へ移らせていただきたいと思います。これまでいただいたご意見やキーワードについて、ホワイトボードに概略を書いておりますので、こういったものを参考にしながら

意見交換をできればと思います。それでは福田市長、よろしく願いいたします。

<意見交換>

市長：ありがとうございます。

ここからどういうふうに話をしていこうかなと、今聞きながら考えていましたけど、幾つかキーワードが出てきたと思いますが、非公認というキーワードだったり、勝手にやっているとか、そういうなかなか活動する場というのが、正式な形でないというのが、何となく大方そういう感じだったんじゃないかなと思うんですね。

実は、川崎市は音楽のまちづくりというのをやって、今年で14年目ぐらいになっていますが、溝ノ口や、川崎駅でもそうですけれども、駅前なんかでバンドだとかパフォーマンスをやっている人たちがすごく多いと。

実はあれ、やっぱりだめなものはだめなんですよ。だめなものはだめなんだけど、でも一定のルールでやっていきましょうよという、何となく緩いルールを作って、それでもって運用していると。だから、駅のこのあたりでやってもらえませんかとか、駅のここはOKにしましょうとかというのを、何となくそれでやっていただいている団体の皆さんとで協議しながら、公認なのか非公認なのかという微妙な線なんですけど、何となくルールづくりをやってきて、その中であんまりボリュームはちょっとこの辺ぐらいでみたいなのというのは、だんだんやることによって、一定のルールはもうできてきちゃったということなんですよ。

ですから、僕もこれって、苦情ってどのぐらいあるんですかみたいなことを、何年か前に聞いたことがあるんです。10年ぐらい前は、すごいやっぱり苦情多かったんですよ。それが、今年ぐらいから、もうほとんど皆無ですかね。本当に皆無に近い、時々川崎駅前でも余りにもボリュームを上げてしまったら、その存在を知らない、川崎で1回やってみようぜというので、ぼんと来ちゃった人が、ルールを知らずに音をガンガン上げて、皆から、音楽やっているメンバーからもちょっと白い目で見られて、だめだよという感じになっているので、そういう意味では音楽のまちづくりをやってきた観点からも、そういうルールづくりというのは何かやれるんじゃないかと、ある意味、自信を持っているんですよ。さっきの溝ノ口の駅前のところも実はフローリアーズのメンバーの皆さんとか、ああいう方たちがずっとやっていて、それこそ挨拶をして、しっかり夜中でも何か酔っぱらいが来たときでも挨拶をしっかりするとか、何かそういうようなことを自分たちで、すごい努力を重ねてこられたことをやっぱり通行人とかがよく知っていると、認知されてきたと、長年の中で。そうやって何か確立してきたというふうなのが、これなしには多分できなかったと思うんですね。だからそういう、これはいい、これはだめって、行政でぴつというふうなことで全てが解決するかという恐らく解決しないので、そういう雰囲気はどうやって一緒につくっていくかということは、すごく大事ななというふうには思っているんですよ。

その辺について、もうちょっと補足、話あるよというのがあったらコメントいただけますか。何か、非公認とか、勝手にとかという、いろんな悩みもあるでしょうし、こういうところにもう少し力かしてもらおうといいんだけどとか、理解が進むといいんだけどとかという話。

安井さん：今回のテーマの中で若者文化と簡単には出しているのですが、ただやっていらっしゃるプレイヤーの方々全員はストリートカルチャーだと多分認識していると思うんですね。普通のスポーツは日々トレーニング、練習があって、それは基本的に人に見せるものでもなければ発表するものではない。大きな大会があって、そこで記録や点がつく、それを評価してもらおうというスタイルだと思いますけども、我々がやっている、多分皆さんそうだと思うんですが、例えばさっきの檻の中の話じゃないですけども、完璧な施設を用意されて、じゃあここで練習してください、これからはここでやってくだ

さいと言われても、絶対ここに収まらないです。

どうしてかといったら、僕らは練習している姿すらもみんなに見てもらいたい。途中経過ですら人にアピールしたいし、基本目立ちたがり屋なので。あとは、まちは僕らにとってはもう遊園地並みに楽しい場所です。もうUS Jやディズニーランドに行くことよりも、まちなほうがよっぽど楽しいと思っているので、一般の方々からしたら、まちで騒がしい、何か手すりとか椅子でごりごりやっているとわかってしまうのは当然わかるんですけども、僕らの目線で見ると、こんなにも楽しい場所はないというところがあるので、やっぱりそこはお互いがもうちょっとすり合わせをしていって、あの子たちは、あれは遊んでいるんじゃないんだ、練習しているんだと、当然、公共物が破損していたりすることもあるので、それはお互いすり合わせしなきゃいけないんですけども、もう少し我々がやっていること自体が遊びのようであって遊びじゃない、ふざけているようだけど真剣にみんな練習をしている、そしてその練習すらも実は見てもらいたいというところを、ぜひ一般の方々にはご理解いただくと、もう少し我々も日々楽しくできるのかというのはあります。皆さんもどうでしょうか。

市長：どうぞ。

金後さん：今ちょうどお話いただいたんで、本当にこの2カ月ぐらい、僕この15年いる中でも、3本の指に入るぐらいの苦情が入っていて、本当に彼女たちも練習時間と場所を変えようかという話もあるくらいでして、ツイッターとかでも上がってて、すごい苦情、誰かが1回、多分若い子、全く関係ない、多分ヒップホップのこのカルチャーじゃない子たちがダンス練習をして、ご迷惑したかどうかわからないんですけど、この2カ月ぐらいすごい苦情が入っていて、僕もまさにちょうど二日前、練習した日にも、僕ひとりで9時ぐらいから11時ぐらいまで練習しようと思っていたところ、警備員さんに注意されているところを一般の方に、絡まれてじゃないんですけど、お父さんに絡んでいただいて、久しぶりに僕も本当、かばんさわられて、もう帰れよと言われるぐらい久しぶりにご指導いただいて、僕も久しぶりに熱くなっちゃって、「僕、二日後こうやって話すからって、騒ぐなお前」みたいな感じに一瞬なったんですけど、原さんとかの顔が思い浮かんで、今ここでもめてる場合じゃないやと思って、1回こらえようと思って、だから、さっきおっしゃってくださった、僕らもそれをもちろん警備員の方とお父さんにお話しましたし、緩いルールでやらせてもらっているんですけども、ここは緩いルールでやっているんだよねと認知してくれている方は大丈夫なんですけど、邪魔って判断した人に苦情を入れられると、どくしかないのが現状で、ここ最近で認知上がってきたなという話と同時に、まだ苦情入れられると我々は帰るしかないんだなというのが、すごいやっぱり憤りを感じますし、さっきの部分のお話の補足としては、僕は本当に17歳のときから、本当に今の代表の石川とかに、この日は空けておいてって言われて、何があるかもわからず高津区のお祭りには無償ですと出させていただいて、ごみ拾いもずっとやらせてもらいましたし、お手伝いは、もう50回ぐらいはやったんじゃないかな。いろんな場所で、無償で僕らも躍らせていただいたり、福島地震があったときは駅のところで募金活動で皆30人ぐらいでやらせていただいて、そのいただいた募金のお金も送らせていただいたり、そういう活動はずっとさせていただいて、さっきお話もらったとおり、市がOK、区がOKとかとの話とは別に、まちの人たちに理解してもらえるように、そういう活動を僕たちの先輩たちから受け継いで、僕ももう15年間、そういうお話があったときは出るようにはずっとさせてもらって、理解が広まるようにはやらせてもらっているんですけど、苦情が入ったらまだ帰るのが現状です。

市長：なかなか厳しい状況。ありがとうございます。実態をお話していただいて。

これ、ストリートカルチャーだけに言える話じゃなくて、いろんな苦情をいっぱい受けています。毎

週市長への手紙というコーナーがあって、毎週毎週すごい量の苦情だとかご意見だとかというのをいただくんですけど、例として言うと、いろんな悩みあるんですね。例えば、これだけ狭いエリアなので、住宅密集地。工場で物を作っている方たちも、もともとは工場しかなかったのに、そこに住宅地ができ始めて、そこが住宅になると、周りの工場の音がうるさいと言われた工場の人たちは、えって。ここは私たち40年間ずっと操業しているのに、なぜこの苦情言われなくちゃいけないんだろうというのがあるんですね。そういう悩みがあって、実は工場の人たちが何をし始めているかというところ、この数年間というのは、オープンファクトリーという取り組みをやっていて、私たちこういう物をつくっています。だからこういう音が鳴るんですというのを、工場のシャッターをあけて週末とかに、お祭りと一緒にイベントをやっちゃっている。そうすると、隣の住宅の人たちが、ああって、このにおいはここから来ていたのかと、あの音はこの音なのかというふうなのができて、やっている人と住んでいる人たちが、ああそういうことなのねっていうのがわかって、ようやく徐々にでありますけれども、その理解が進んできているという取り組みをやってくれているんですね。

それも私たち行政絡んでいるんですけど、行政が住民の人に、すみませんそれを我慢してくださいと言っても我慢ならないんですね。だけど、一緒にこの地域で活動している、住んでいる人たちが、どういうことなのかとお互い理解するというところを見せていきたいと思いますという取り組みは、確実に理解につながっていると思うんですね。

だから、例えばごみ拾いをやっていただいたことも、あるいはもっと本来的に、この競技だとか、あるいはこのカルチャーだとかというのを見てもらって理解してもらおうということが一番の理解につながると思うんですね。

だから、いやいやDeeさん、見た目ちょっと怖いとかって思っても、Deeさんと話してみると、意外と優しいとか、むちゃくちゃ優しいとか思うと、一気に理解が進む。もっと見てみたいとかっていうふうなことになるし、ということが、どんどんつながっていけばいいかなというふう思うんですね。

スケートにしても、音が鳴る。音が鳴るって、やっぱりすごく皆シビアなので、ちょっとスケート系のグループと、ダンス系のところって違うという課題を抱えているのかなというふう思うんです。音とかの部分だとか、あるいは施設が本当にいるかということになると、ちょっとまたグループは違うのかなというふうな気がしますがそれでもね。

何か三瓶さん、ご意見ございますか。

三瓶さん：自転車の道路交通法というのが数年前に改定されて、BMXに関しては、レースの場合はうしろ側しかブレーキがなくて、フリースタイルに関しては選手によってなんですけど、スタイルによっては前後ともつけないというのが主流になっているので、そうすると家から一步出たらそれは道路交通法違反になってしまって移動できない。もちろん現地で滑ることもできないですし、そのまままちを漕いで回ることすら、もう違反になってしまうので、そうなるとどうしても施設が必要というのが、BMXとしては課題としてありますし、先ほどの説明にあった、ジャンプ台で練習したいというところはもちろんなんですけど、まず外で乗れないというのが根本的な課題で、多摩川を乗るのもだめだと思いますし、そこがちょっとつらいところですね。

市長：先ほど、ストリートカルチャーという文化ということと、ブレイキンなんかもいえると思うんですけど、これってスポーツなのって。河合来夢ちゃん、今回金メダリストですから、本当にスポーツとしてのものになっていると。だけど、もともとはアートというのか表現というのか、ストリートで表現していくというものが、もうスポーツの領域に入ってきたという話なので、何とも線引きが非常に難しいですね。これはスポーツですかって、大会があって、BMX、レース、もちろん完全なるスポー

ツですよ。

三瓶さん：BMXレースに関しては、よりアスリート種目になっていまして、自転車に乗るのもそうですが、ジムに行ってトレーニングして汗を流してみたいなふうになっているんですけど、この間、実際に僕もユースオリンピックのBMXで帯同させてもらって、来夢ちゃんの試合とかも見させていただいたんですけど、ストリートカルチャーから競技であったりアスリート、スポーツとして成り立っているという現場を見させてもらって、だんだんだんだん、ストリートカルチャーからスポーツに向かってアスリート種目になっていくので、本当に施設というのは絶対いると思います。ボールを持っているけどサッカーゴールがないとか、そういうような現状であると思うので、そういうちゃんとした施設はやっぱり必要なと思います。

とはいえ、先ほど見ていただきたいというところもあったりと思うので、何かしらで、ここはブレイキンできる場所ですよとか、もしくはポスターに、ブレイキンやりますスケートボードやりますとなれば、川崎はそういったものを理解しているまちなんだということが進むかもしれないですね。やっぱりルールというのがどうしてもあるので、法律にひっかかるとか、それだけは何とか避けたいところですけど、ある程度檻の中という言い方になっちゃうのかもしれないんですけど、少しは困ったりしたほうがいいかなと。

スポーツを、大学とかで部活動があればまた別ですけど、なかなかBMXの部活動は一個もないですし、ブレイキン部というの、まだ聞かないので、スポーツとして世界を目指せる、トップを目指せるという環境も課題かなと思うんです。

市長：これだけある意味、競技というか、ジャンルは一緒なのかもしれないけど、違うというふうになってくると、川崎市としてどういうものを応援するのというふうになると、やっぱりちょっと言い方が正しいかどうかわかりませんが、若い人たちが、川崎に来ると何かすごく可能性があるよねと。何か世界を目指せる可能性があるまちだと。だから、スケートをやるにしたらって、川崎行こうよって、あそこだったらいい人そろっているし、やれるところもあるよというふうなこと、あるいはダンスならブレイキンなんかも、金後さんは広島ご出身ですけど、佐世保から来たりとか、何か全国から溝ノ口を目指してきてるとか。この前、英国のオリンピックチームの人が溝ノ口に行きたいというから、何のことかと思ったんですけど、原さん、そのお話をちょっとご紹介してもらっていいですか。

室長：イギリスのオリンピックチームのボクシングのコーチと話をしていたら、スマホでここに行きたいと。溝ノ口ですよ。何しに行きたいんですかと言ったら、ここにKATSU1(カツワン)さんっているよねと。いますいますと。私は趣味でブレイキンやっている、KATSU1さんと踊りたいと。私たち、たまたま知っていたので、その場で電話をして次の日の夜10時に連れて行って、そこで一緒に踊ってもらったんですけど、やっぱりそれが世界の聖地と言われる所以か、やっぱり川崎ってそういう可能性があるんだなという、正直びっくりしましたね。オリンピックのコーチにここに行きたいと言われて、それはやっぱりKATSU1さんに会いたいという。

市長：そうですね。多分、KING OF SWAGの皆さんのツイッターのフォロワーって、むちゃくちゃいらっしやいますよね。

中野さん：そうですね、Deeが世界に向けて活動する上で、時代の流れをかつこよく取り入れたいというのを積極的にやるので、それでSNSで発信するというのをすごい頑張ってるって、そこでフォロワーが増えて、見る人が増えています。

市長：ちなみにどのぐらいいらっしゃるんですか、フォロワーって。

中野さん：今、De eさんが11万人ぐらいですかね。

市長：11万人。

中野さん：KING OF SWAG全員集めると35万人。それぞれいろんなファンがいるので。チーム全体としては、大きい母数を持って、開かれたかっこいい川崎を紹介しています。

市長：ありがとうございます。恐らく今のイギリスオリンピックチームのボクシングのコーチが溝ノ口行きたいと言って、えってなったけど、それはまさにKATSUIさんが発信されているからですよ。KING OF SWAGの皆さん全体で35万フォロワーがいると。川崎を発信するといつて、あそこに行ってみたいというふうな形になるというので、これはやっぱり、ある意味全部がトータルで整ってなくちゃいけないですよ。 「やる場所がある」「人がいる」「そのキーとなる人がいる」そしてそれが「発信できている」という、何かそういうものが全部トータルじゃないと、なかなかそれは難しいだろうと。それが整っているところに、人がどんどん集まってくる。さらに相乗効果で集まってくるというのが生まれてくるんじゃないかなというふうに思うんですよ。何かこのことについてご意見いただいてもいいですか。安井さん、片桐さんも世界の事情なんかも。

片桐さん：例えばロサンゼルスなんかだと、おもしろい取り組みがあつて、スケートに限った話なんですけど、行政がスケートプラザという場所をまちのあちこちに作り始めたんですけど、これは、今までのスケートパークの枠とは違って、ヘルメットをつけなくていいし、出入りも自由、お金も払わない。公園の一角にちょっとストリートとパークのあいこのみみたいな感じですね。明確なルールもなく出入りしていい場所というのを作ってやっています。だから、そういう場所を作ってもおもしろんじゃないかな。檻に入れられている感覚もないし。あと、サンフランシスコなんかだと、大体4ブロックに1個ぐらいずつ学校の校庭なんかをスケートエリアとして開放しているんですよ。ちょっと車で走ると、そこにもあるここにもあるみたいな感じで、スケートエリアがいっぱいあつて、大体20ブロックに1個ぐらい大きいスケートパークがあつたり。そこに技を競いたい者は集まって、普段の日はそういう小さいスケートクラブなんかで練習してというのがトレンドになっています。

市長：ありがとうございます。

虎君のお父さんも言われていましたけれども、そうは言っても、なかなかまだ関東近県でも練習できるスペースってなかなかないよねというのが、三瓶さんからもそういう話だし、スケートパークにしてもいろんなレベル感があるぞというふうな、ある意味、箱だけ作ってもということもあるでしょうし。そのあたりは、ぜひこれからもこういう機会だけじゃなくて、いろんな機会を通じていろんなご意見をいただければなというふうに思います。

それとやっぱり、今日は駅前ホームというところがあつて、いろんな人が見ていましたけれども、より多くのところで競技を知ってもらいたいと。

河合来夢ちゃんが、ユースオリンピックで金メダルをとったというのが、いろんな媒体で新聞なんかに載りましたが、それだけでやっぱり、そうなのかっていうのが一気に広がる。だから、何かそういうキーマンがいるとすごく大きいものがありますよね。だから、そういう人を次々と育てられるよう

な環境というの、さっき安井さんがおっしゃっていたけど、ウッドワードというのは、人材を育成する機能もあるということですよ。

だから、そういう意味では、かなりメンバーはそろってきているんじゃないかなと、いろんなところでですね。だから、それをもう少し深められるかというところにあるんじゃないかなと思いますけれども。

地域の盛り上げに向けて取り組みたいことということで、少しいろんな話を伺いましたけれども、場については、あるいは場をつくることによって地域の理解というふうなもの、あるいは認知度というものも向上すると思いますけれども、今の現状の中で地域を盛り上げるイコール認知度が上がるということにもなってくると思うんですけども、自分たちでこんなことできるんじゃないかとかというふうな話で、もう少しアイデアいただける方いらっしゃいますでしょうか。

ダブルダッチ絶対おもしろいですよね。だって、今日初めてやった、虎君もそうだけど、あと二人も意外とやれているという、入りやすいですよね。ほかに別に設備がいるわけではないので。どうですか、いろんなことやられていて、まちの盛り上げにこれだけ役に立っているぞというご自慢がしていただけるとうれしいんですけど。

立山さん：確かにそうですね。2本のロープさえあれば、いつでもどこでもできるので、溝ノ口でも練習とかしているんですけど、あとは地域というか、皆がわいわい集まって誰でも彼でもダブルダッチしようみたいな取り組みもあって、駒沢公園とかでやったりするんですけど、レッツプレイダブルダッチという中で、そういうタイトルで小さい子から大学生だったり、もしくはお父さんお母さんだったりとかというところまで含めて、一緒にダブルダッチやろうと。

ダブルダッチって今日もやっていただきましたけど、本当にちゃんとパフォーマンスをつくることもあるんですけど、今日みたいに本当に気軽に、さあやってみよう、はい飛ばましただけでも、すごいその日の経験になると思うので、そういったふれあい、誰でも参加できるようところで貢献できるんじゃないかなという気はします。

市長：ありがとうございます。ブレイキンとのコラボみたいなのはどうですか。すごく似ていると思うんですけども、そこはやっているんですよね。

金後さん：昨年ダブルダッチのプロのチームの子たち3名と、僕が個人で持っているチームの子3人、6人でブレイキンとダブルダッチのチームを初めてちゃんと組ませていただいて、15年前に先輩たちも組んでいたんですけど、それでブレイキンの競技大会に出させてもらいました。予選から上がったらバトルに残れるんですけど、初めてバトルまで残ることができたので、やっぱりダブルダッチとブレイキンというものの相互性というか、ダブルダッチの縄の中でブレイキンやります、アクロバットなこともやるので、一緒に組んでやれることは多々ありますね。

うちの会社の役員がダブルダッチのボスも入っているんで、僕の中でもこの会社は6年間ぐらいはブレイキンを運営しつつも、ダブルダッチとずっとかかわってきているんですけど、何かブレイキンの強さって個の強さだと思っていて、やっぱりクルーで動いているけど、最後の最後はソロで戦うし、最後に技を決めるのはソロっていうところがあるんですけど、ダブルダッチって、まずそもそも3人そろわない限り練習することさえできないので、彼らのカルチャーに感銘を受けたのは、本当私生活からびっくりするほどの輪の強さなのです。先輩の言うことは絶対だし、仲間がやることを本当に協力するし、何でこんなにすごいんだろうと思ったときに、一人ばっくれたらもう練習できないし、それブレイキンしょっちゅうなので、来なくなっただけ今日っていうやつが当たり前だし、時間を守らないのも当たり前だし、何かそれに対してごめんもないし、それはそうでしょみたいな顔で来るのが

普通なんですけど、それが絶対に起きないこのダブルダッチの輪の強さっていうのは、ここで言うとスケボーでもそうだと思うんですけど、そこの僕らとの個の強さでいい意味で協調性がない部分を彼らはすごく備わっているから、僕らの会社もうまくいっているのかなと思います。

例えば、ダブルダッチの輪の強さだったり、KING OF SWAGさんのSNSなんかもすごく参考にさせてもらっていて、僕らも何か一人ひとりのSNSの時間ってすごくあるんですけど、僕もいつも拝見させてもらっているんですけど、チームでストリートであの感じ、1分のものを載せているのとかが、僕らからすると、すごいこれ1回真似しようかと言って真似しようかと思ったけど、結局集まらなくてで終わっていて、新しくルーティン作ろうって思ったけど、だりいなってなって、やらなかったんで、僕は今回の帰ったら、やっぱりKING OF SWAGさんのああいう部分は真似していこうと、また話したいなと思いました。僕はこういう人たちの、多分僕らの個の強さの人たちと輪の強さの人たちは何か得るものがあるんじゃないかなというのは、日々思います。

市長：ありがとうございます。

さっき、村田さんが、いろんなところに出ていってくれていて、普及活動というか、競技を知ってもらいたいなとかというふうな形で出ていってくれているという話を聞いたんですけど、ほかのスケート系とは一緒にやるということはあるんですか。

村田さん：デモとかだと、よく一緒になったりとかは。あと練習とかのときは、もう本当にインラインスケートは人がいないので、僕はもう小学校、幼稚園のときからずっとやっていて、そのときからずっと、スケートボードとBMXの子たちばかりの中で一人だけインラインスケートをやっているんで、BMX、スケートボードの子たちの交流というのは、多分いっぱいありますね。

市長：イベントなんかで逆にダンスとかダブルダッチだとかというところとは余りない。

村田さん：余りないです。

市長：可能性としてはあるんですか。例えばBMXと。

金後さん：この間広島でやったやつとかは一緒でした。

広島で、アーバンスポーツの世界大会の中にブレイキンも入らせていただいて、その時BMXのフラットランドがステージでやったその後に、同じステージでブレイキンもやらせていただいたんですけど、広島でイオンさんで、提案したときに、ブレイキンがはまらなくて、スケボーだったりBMXの人でやりたいというのがあって広島のイオンさんのほうでスケボー枠組ませていただいて、BMX、スケボーという形でキャスティングして、その人たちと仲良くさせていただいて、スケボーの子なんですけど、岡山の子と一緒にやらせていただいてという機会は、何かでも一緒にしようという、ちょっとズレはあるかもしれないですけども、同じ現場で、その後ブレイキン出てくるみたいな、それをうまく合わせてみたいなのは昔先輩がやっていたんですけど、BMXのフラットランドとブレイキンのコラボをやっていたんですけど、そういうふうの一つのショーをつくり上げるというのは余りないかもしれないですけど、でも現場で一緒に一つの催しものを30分間、一緒に催しものをつくらせていただくというのは、今までは何度かあります。

市長：何か全く関心がなかった人たちに見てもらって関心がわくというためには、来てもらうよりも人がいるところで皆でやるというのが、一番早いような気がするんですよね。例えば川崎市がこういう若者

文化というふうな定義をさせてもらいましたけれども、こういう集まっているメンバーといい、さまざまなものを応援しているんだというふうなことを発信するという意味では、何かそういうのを、人のいるところで川崎市と一緒にやるのって、何かいいんじゃないかなという、感覚的には思うんですけど、どう思われます。それは面倒くさいと思うのか、どんなものですかね。

片桐さん：そういうイベントがあったら、ぜひ参加したいなと思います。すごく可能性を感じますし、例えば、スケートボードとBMX以外にも、同じセクションを使っても全くアプローチの仕方もトリックもラインの取り方も全く違うんですよ。そういうのをあえて見せる場にするというのもおもしろいのではないかなと思います。

市長：すごくジャストアイデアの話なんですけど、これはかなりハードル高いですけど、川崎市役所の前の道路を封鎖して歩行者天国なんかにするとすごくおもしろんじゃないかなと思って。日常的にやると、すごい警察呼ばれるので、とんでもない大変なことになるんですが、いろんな競技をここを封鎖してやりましょうよとすると、買い物に来た人も、ただ歩いている人も、何だ何だと。それって川崎市が応援していますから皆で一緒に盛り上げているんですよというふうな話であると、ちょっとおもしろいかなという気もするんですけどね。

安井さん：昔、原宿で歩行者天国やっていたので、27、8年ぐらい前なんですけど、月に1回ハーフパイプを関西から持ってきてましてデモンストレーションしているチームがあったりとか、あとは神奈川県藤沢市なんかですと、藤沢市民祭りで藤沢駅のバスターミナルを全部お祭りで使うんですけど、その中で僕らはスケートボード、インラインスケート、BMXのお祭りやったこともありますし、海外ですとゴースケートボーディングという日がありまして、6月21日でしたっけ、まちをスケートボーダー何万人がまちを滑る日があるんです。今日は皆スケートボードをしようという日があって、いろんな場所から集まっている。

片桐さん：高速道路の中もスケボーで走ったりもします。

安井さん：そういったこともあるので、例えば川崎でしたらハロウィンのときに、ハロウィンパレードの中で一角、10分間とか20分間とかせき止める時間をつくっていただいて、パフォーマンスや体験をしていただければいいのかな。実際よくやるのはパフォーマンスじゃなくて体験会もやるんです。僕らが、プロスケーターが滑って、その後にお子さんもお父さんもお母さんもぜひよかったらどうですかと、スケートボード、インラインスケート、BMXとかをやらせてあげる機会を作るんですよ。そうするとやっぱり先ほどおっしゃっていた理解、相互理解というのも増えますし、新しいユーザーが、ちびっことかも増えて、川崎市として活気がどんどん盛り上がるというところにも合致すると思うんですけども、ぜひそういうお話があればやりたいなと思います。

市長：おもしろいですね。

今、聞いていながらいろんなアイデアが湧いてきましたけど、今全部言っちゃって皆びっくりすると思うのでちょっとやめておきますけど、いろんなことができるなと思いますね。

市民祭りなんか、三日間で50万人も動員します。そういうところでも、KING OF SWAGさんには出ていただいてありがとうございます。いろんなコラボができると理解も進むかもしれませんね。

そうなってくると、本当に音楽の路上の話もそうなんですけど、だんだんそういうことなのねという

ふうに、うちのまちってこういうことなんだというのになってくると、やりやすくなっていくというか、スケートパークとは別の意味でストリートという意味では理解が進むというのは、違ったものが出てくるのかなと思いますね。

一朝一夕、明日からぱっと変わる話ではないですけども、だんだんとそういう雰囲気になっていくというのを皆で応援し合っていくということが大切かなというふうに感じさせてもらいました。大分しゃべって、ご意見いただいていない方もいらっしゃるので、ちょっとこの際という方はいらっしやいませんか。

岸田さん：施設のことに関しては、僕はスケートボードの中でも、ダウンヒルとって、山を滑り降りる競技をプロとしてやっていますが、自分の子供はBMXやっていて、スケボーは余りやらないんですけど。

例えば、スケートパークでスケボーと一緒に集まった、BMXと一緒に集まった、インラインスケートと一緒に集まったとなったときに、子供たちは選択肢がふえる可能性があって、最初はスケボーかもしれないですけど、その後BMXやるかもしれないと、ダンスもやるかもしれない、そういう意味で、まとめて可能性を増やしたほうがいいのかなどは思うんですね。

先日、静岡のほうでスケボーとBMXとインラインのボードの大会をやって、ハーフトラックなどのレーンですけど、いろいろ合体してやったほうが子供たちは可能性が増えていいのかなと思って、結局、今いる方たちがプロ、トップの方たちですけど、施設ができて集まってやれば、子供の可能性を増やすということも大事だと思うので、そういう意味でやっぱり、やる場所というものをきちんと造ったほうがいいのかと思います。

市長：ありがとうございます。相互乗り入れというか、相互応援という形が、実はフロンターレさんなんかすごくうまくやってくれていて、5月4日ですけど、フロンターレと仙台のホームゲームで、そこは相撲とコラボだったんですね。ディズニーランドのイツアスモールワールドにかけて、イツアスモウワールドというタイトルで、ホームゲームのときに、中川部屋という神奈川県に唯一の相撲部屋が川崎市内にあるんですけど、その力士さんを等々力に呼んで、もう昼からずっと、ホームゲームが始まるのが4時ぐらいだったんですね。もう、1時からイベントスタートで、フロンターレがお相撲をずっとやっているんです。始球式も川崎出身の力士が始球式という形で、完全に相撲ワールドになっているんです。それを同じ川崎だということで、フロンターレがコラボするわけですね。

バスケットボールもBリーグが出てきましたけど、川崎ブレイブサンダース、フロンターレ、全く客層被っていないんですね。被っていないんですけども、フロンターレのホームチケットを持っていけば割引しますというふうなのを相互にやりましょうと。基本的にシーズンは被っていないから。お客層はこれから被る可能性があるというので、そういうノリでカバーしているんですね。だから、同じ川崎でつながりましょうよということも、結構いろんなところでやってくれているんです。

川崎ブレイブサンダースのハーフタイムのショーに川崎のダンスチームいきましょうとかっていうふうなことがあったりかって、いろんなつながりを皆地域の中で作り始めているというのは、まさか交わることはないだろうっていう、逆に競合だろうと思っていたところがいろんな形でコラボすることによってマーケット全体を広げているというか。

だから、スケートで入ったけど息子はBMXというふうな可能性というのは、それはサッカーの人がバスケットの場合もあるし。

岸田さん：いつどこで変わるかもわからないし、逆に例えばスケボーをずっとやってきて、BMX、インラインも、結局何かを表現するものなので影響を受けて変わることもあると思うし、そのためには友達

がいっぱいいたほうが良いと思うし、やっぱり何か一緒にやっていったほうが良いのかなと思います。

市長：ありがとうございます。

今日はKING OF SWAGのさんのポスターは貼っていないんですかね。貼れていないですね。これ、川崎のColors, Future!のポスターなんですけど、最新号はKING OF SWAGさんが飛んでいるやつ。今日、ない。なぜ本人がいるのに貼らないのかという、最大の失敗かもしれませんけれども。だけど、川崎のこういう広報って前年度はSHISHAMOさんだったんですね。川崎を世界に発信してくれる、日本中に発信してくれた。

KING OF SWAGさん、川崎から世界に発信してくれている、こういう人たちをやっぱり取り上げて、まさに私たち「Colors, Future!でいろいろって、みらい。」っていうふうなのを表現するのに最もふさわしいということをお願いしたんですけど、こういう形のいろんな組み合わせ方というふうなのが出てくると、もっともっと、今まで子供たちも、こういうスポーツもあるのか、こういうストリートカルチャーもあるんだというのは、入口として感じられるようになってくると、ボールゲームは苦手なんだけど、乗ることはできるかもしれないとか、あるいは踊って表現することができるかもしれないっていう、そういう子たちがどっかにはまってくるとすごくいいかなというふうに思いますね。

そういうことを今日、いろんなコラボレーションとか組み合わせ方があるんじゃないかなというふうなことを思わせてもらいました。ですから、やる場というのは、スケートパークというのも必要でしょうし、あるいはストリートとか、まちの中でそういうことを表現できる場所というのも必要でしょうし、そういう場と、それからその場を作るにしても、それをやっていない人たちからすると意外と邪魔だったり迷惑だったりというふうなことがないように理解を進めるためにはいろんな場に出ていってもらおう。一緒に活動に協力してもらおうというのもそうでしょうし、そしてお互いがつながることによって新しい価値とか、理解が進むということもあるし、新しい、表現が正しいかどうかかわかりませんが、マーケットが広がっていくというようなこともあるでしょうし。

そんなことが今日のきっかけから始めていければいいなと。もう既に進んでいるところもあると思いますけど、もっとスパイラルアップさせていくという取り組みをガンガンやっていきたいなというふうに思っています。

この若者文化の基本的な考え方みたいなのを外に出したので、まだ昨年のお話なので、まさにこれから始まるということなので、ぜひ皆さんの力かしてもらいたいなと思っています。

何か、言っておきたいということありますでしょうか、一言。どうぞお願いします。

中野さん：KING OF SWAGのマネジャーをしております中野と申します。昔からKING OF SWAGは自主的に川崎での活動をともにしてきました。私個人として今回のこういう会議の場にお誘いいただいて、いろんなお話も聞けて、すごい勉強になりましたし、すごく感謝しています。

今回、若者文化の発信によってまちをつくっていく、そういうタイトルになって、まさに僕らってこういうことができたらいいなと思っていますので、川崎市さんと一緒に今後ともやっていければと思っています。

やっぱり、それぞれ今日お話してくださって、やっぱり若者文化の発信に対して、施設をどうよくしていけばいいとか、どういうイベントをやって、どう走る、いろんなことができるのかというのを、たくさんの方がこれだけ考えてくれているということにまず感銘を受けていますので、僕らも頑張ってきて良かったなと。

さらに僕らはまちを、僕らのグループはどうまちをつくっていくことに貢献できるか。自分らで貢献しますと言ってやっているつもりもないんですけども、自分らが思ったことを頑張ってやって、そ

れがまちづくりにつながっていけばいいなと思っていて、それをいろんな方がいろんなやり方でやられるので、そういう意見交換の場自体が、まさにこのまちづくりにつながる第一歩だなと感じました。こういった機会ですぐの会話、いかに継続的にやっていけるかということがまずは第一歩で、お互い仲良くなって、仲間がこんなにすごい、もう名だたる方ばかりの人たちが仲良くなって、そこから、文化って時間がかかるものだと思いますし、やっぱりノリで仲良くなっている部分もあると思うので、どんどん皆さんと仲良くなって、楽しいまちづくりができればいいなというのを、今日聞いていて思いました。

市長：ありがとうございます。すごいいいコメントいただきました。本当にありがとうございました。ほか大丈夫ですか。

今日が一つのスタートとして、ぜひ今おっしゃっていただいたように、顔の見える関係というか、あの人こういうことやっているんだというのから、より深く知れる、そうしたいろいろなアイデアが出てくるんじゃないかなという気もしますので、ぜひこれからもつき合っていただければというふうに思っています。

司会：ありがとうございます。市長の話と、あと中野さんからのいいまとめがありましたので、車座集会はこれで終わりにさせていただければなと思っております。

市長：担当の原さんからもちょっと一言。

室長：担当ということで、オリパラ室でこの若者文化をやっていますが、今日いろいろ聞いていて、若干感想も含めてというところと言うと、やはり認知度の向上、地域の理解ということが非常に重要だなというところが一つあるのかなと。それは、自分たちを知ってもらうことと、そういうものが川崎で取り組んでいる、若者文化という言い方をしていますけれども、ストリートカルチャー系とエクストリームスポーツ系という、ダンス系とそうじゃないところというのは環境も違うので少し違いがあるのかなということがありましたけど、ただやっぱり、皆さんがやっていることは自分たちの活動を知ってもらいたい、それを日本中に、世界にという取り組みがあるということと、自分たちが住んでいる地域を何とか元気にしていきたいということだと思います。基本方針が秋にでき、一応行政マンなので基本計画というものをつくるんですけども、そこでどういうふうにしていくのかなという中で、やっぱり競技力の向上に向けた施設がほしいというお話と、日ごろ練習をしながら皆に知ってもらえるような、それが多分ストリートカルチャー系で、次のステップでオリンピックでメダルを目指す人を育てる施設みたいな話なのかなと、その辺を踏まえて、基本計画をどう書こうかな。

実は皆さん、すごいパブリックコメントで意見をいただいて、担当は整理をするのにすごい困っているんですけども、それに答えられるような形で、先ほど海外ではまちの中でもできると。ここに、今日たまたまスリーオンスリーの方がいらっしやらないんですけども、やっぱりそれも重要なコンテンツであるというふうに思っていますので、あと、エクストリームスポーツとしての、パルクールも一応基本計画では位置づけていて、実はここにパルクールやられている方はいないんですけども、水鳥さんという全日本の体操の男子強化部長さんが、中原区で水鳥体操教室というところをつくっていて、そこで将来オリンピック選手を育てたいという、そこではやっぱりパルクールもというお話もいただいていたので、そういうことを、また先ほど中野さんからもお話ありましたけど、私たち一つコミュニティを作りたいということもあるので、そういう人たちも入れながら、何回かこういう場を設けながら、皆連携をいただきながら、市として何ができるのか、ちょっと市長のアイデアが後で怖いんですけど、そんなことを一緒にまた、皆さんと相談させていただきながら取り組ませていただければというふうに

思います。

すみません、ちょっと取りまとめというか感想になってしまいました。

市長：ありがとうございます。市民文化局長も一言。

局長：今日お話をきかせていただいてありがとうございます。その中でも出てきましたけれども、皆さんごみ拾いに参加していただいて、しっかりと地域の方々もおつき合いをしていただいている。多分そういう中でしっかりと地域の方々もこういうスポーツがあるんだというのを知っていただきながら、ちゃんとルールを守ってくれるんだなということを、皆さんが地域の方々にもアピールをしていただくと、だんだんに文句をいう方が少なくなってきたり、この人たちはちゃんとこういうふうにやってくれているんだというような、そういう説明を周りがしてくれるという環境ができると思います。ストリートに出ている、ぜひそういうみずから地域に出ていくということも一緒にやっていただきながら、しっかりとレベルを上げていただいて、世界的に川崎をアピールしていただくという両面でやっていただくと、我々も地域に説明がしやすい状況ができてくると思います。

音楽でも、だんだんにそういうところで作られていっているところもあると思いますので、ぜひともこれからも頑張っていただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

市長：本当に今日はありがとうございます。私も今日初めてお会いする方というのが多かったので、そういう意味では顔の見える関係ってさっき言いましたけれども、こんなにすごい人たちがいるのかということに改めて気づかされましたし、ぜひこれを皮切りに力を貸していただければと思います。

本当に今日はありがとうございます。

司会：これもちまして、車座集会は終了させていただきたいと思います。